

■2025 年度日本地震工学会受賞者

日本地震工学会では、「公益社団法人日本地震工学会定款第 4 条第 1 項第(7)号」および「公益社団法人日本地震工学会一般規則第 3 条第1項第(5)号」に規定される「業績の表彰」に基づき、理事会による審議を経て、2025 年度の受賞が決定いたしました。心よりお祝い申し上げます。

2025 年度日本地震工学会 功績賞

賞区分	受賞業績名/業績発表論文	受賞者名(敬称略)
功 績 賞	業績名称：地震被害評価および災害リモートセンシングを基盤とした地震工学・地震防災の進歩・発展に対する貢献	山崎 文雄 千葉大学名誉教授
	<p>■受賞理由</p> <p>山崎文雄氏は、長年にわたり地震工学・防災工学分野に携わり、とくに地震被害評価、災害リモートセンシング、地理情報システム(GIS)を用いた災害情報分野において、学術的発展と実務的展開の両面で顕著な成果を挙げてきた。東京大学生産技術研究所助教授、千葉大学教授を歴任し、千葉大学名誉教授となられてからも我が国の地震防災研究を継続的に牽引してきた。</p> <p>研究活動においては、地震被害の把握・評価手法の高度化に加え、衛星SARや航空レーザ計測等を活用した広域・多時期の被害抽出、復旧・復興過程の把握など、災害リモートセンシングを地震防災に実装する研究を先導してきた。これらの成果は、地震直後の迅速な被害把握から中長期の復興モニタリングに至るまで、地震工学の対象領域を拡張し、防災実務への応用性を大きく高めた。</p> <p>また、教育・人材育成の面でも、大学および研究機関における長年の教育研究活動を通じて、多数の学生・若手研究者・技術者を育成し、地震工学と防災情報技術の双方に通じた人材育成に貢献した。さらに、内閣府の首都直下地震モデル検討会、南海トラフの巨大地震モデル検討会、相模トラフ沿いの巨大地震等による長周期地震動検討会、千葉県地震被害想定調査検討委員会、JAXAの大規模災害衛星画像解析ワーキンググループ等に参画し、地震被害想定の高高度化、防災施策の検討、衛星画像を活用した災害対応技術の実装に寄与した。日本地震工学会においては、2013～14年度副会長・理事、第14回日本地震工学シンポジウム実行委員長、2006～09年度リモートセンシング技術を用いた災害軽減に関する研究委員会委員長などを歴任し、本会の運営に大きく貢献した。</p> <p>このように山崎文雄氏は、「地震被害評価および災害リモートセンシングを基盤とした地震工学・地震防災の進歩・発展に対する貢献」において極めて大きな功績を有しており、日本地震工学会功績賞を授与する。</p>	
	業績名称：地盤地震応答解析理論の先駆的構築と国際的地震被害調査を通じた地震工学の発展に対する貢献	東畑 郁生 東京大学名誉教授

功 績 賞	<p>■受賞理由</p> <p>東畑郁生氏は、長年にわたり地震工学および地盤防災工学分野の研究・教育活動に携わり、優れた学術成果を残すとともに、地震被害調査を通じて、多くの研究者や技術者の育成、研究成果の社会実装への取り組みを積極的に行ってきた。</p> <p>研究分野では、室内力学試験を基礎とした液状化を含む地盤の有効応力による一次元地震応答解析理論、およびマルチスプリングモデルによる二次元地震応答解析理論を先駆けて構築した。これらの理論に基づく解析ツールは、実務分野で広く活用されている。</p> <p>地震被害調査では、国内に限らず、イラン(1990年、2003年)、グアム(1993年)、インド(2001年)、パキスタン(2005年)、中国(2008年)、ニュージーランド(2011年)、トルコ・シリア(2023年)、ミャンマー(2025年)など、数多くの海外地震災害の現地調査を実施し、国際的な学術コミュニティにおいて重要な知見を発信してきた。著書「Geotechnical Earthquake Engineering」(2008年、Springer出版)は、地盤耐震工学の標準的な教科書として国際的に認識され、2009年に土木学会出版文化賞を受賞した。また、「Coseismic landslides: phenomena, long-term effect and mitigation」(2022年、Springer出版)の編集を通じ、地震時斜面変動に関する国際的研究成果を体系化し、この分野の発展に大きく貢献している。</p> <p>国内活動では、2011年の東日本大震災に際して、関東地方を中心に液状化災害調査、河川堤防復旧、宅地復旧活動に深く関与し、地盤品質判定士制度の発足に携わるなど、実務的・制度的な側面から被災地復旧に貢献している。</p> <p>学会運営では、学術担当理事(2004～2006年)、副会長(2009～2011年)を務め、本会の発展に大きく貢献した。2025年には名誉会員に選出されている。また、地震工学分野の関連学会を含め、学会運営に指導的役割を果たしてきた。</p> <p>以上のように、東畑郁生氏は、学術的、社会的、国際的な様々な活動を通じて地震工学の発展および本会の声価の向上に大きく貢献しているため、日本地震工学会功績賞を授与する。</p>
-------------	---

2025 年度日本地震工学会 功労賞

功 労 賞	<p style="text-align: center;">高橋郁夫 防災科学技術研究所</p> <p>■受賞理由</p> <p>高橋郁夫氏は、2013年6月から2019年5月までの6年間は会誌編集委員を務め(2015年6月から2017年5月の2年間は会誌編集担当理事)、2023年6月から2025年5月までの2年間は総務理事として理事会の企画・運営全般を行い、本学会の発展と事業の推進に貢献された。特に事務局長交代という重要な転機において、事務局運営の効率化に向けた包括的な検討を推進された。また、業務フローの見直し、職員待遇面の向上に取り組み、組織の持続可能性を確保する基盤を整備</p>
-------------	--

	<p>された。さらに、2024 年に新設された「大崎順彦賞」では、本賞に係る規程の改定と細則の制定、選考規程の策定に尽力され、第 1 回大崎順彦賞の選考委員会の運営において中心的役割を果たされた。</p> <p>これらの貢献により、地震工学に関する分野横断的な調査研究の推進、地震災害軽減のための国際活動の展開、地震防災に関する提言・知識の普及および防災教育等の社会活動、という本学会の 3 本柱の活動のさらなる充実化に寄与された。</p>
--	--

2025 年度日本地震工学会 感謝賞

感謝状	<p>菊地 一雄 株式会社ビックウェブ情報開発</p>
	<p>■受賞理由 菊地一雄氏には、日本地震工学会設立当初から今日まで当会の出版業務において格別のご尽力を賜りました。会誌ならびにニュースレターの作成においては、印刷業務にとどまらず、編集方針にまで親身にご関与くださり、当会の情報発信力の向上に多大なるご貢献をいただきました。また、運営全般に関しても数多くの貴重なご助言とご提案を賜りました。菊池氏の生前のご厚誼とご功績に対し、感謝状を贈るものである。</p>
	<p>涌井 茂 涌井税理士事務所</p>
	<p>■受賞理由 涌井茂氏には、日本地震工学会設立当初より税務・会計業務にご尽力いただき学会経営に対してご助言並びに監査を通じて、当会の健全で透明な運営と発展に多大なる貢献をされました。長年にわたるご献身に対し、感謝状を贈るものである。</p>

2025年度日本地震工学会 論文賞

賞区分	受賞業績名/業績発表論文	受賞者名(敬称略)
論文	内陸地震に対する気象庁マグニチュードと地震モーメントの関係の再評価とそれに基づくスケールリング則の提案	川瀬 博(一般財団法人 日本建築総合試験所), 仲野健一(株式会社安藤・間技術研究所), 入倉孝次郎(愛知工業大学)
	<p>■受賞理由 本論文は、近年日本で発生した内陸地殻内地震を対象に気象庁マグニチュード M_{JMA} と地震モーメント M_0 の関係を整理し、新しい関係式を提案するとともに、その関係式に基づき、地震調査研究推進本部の震源断層を特定した地震の強震動予測手法(以下、「レシピ」という)で示されている、活断層長さ L を起点に震源パラメタを設定する方法(以下、「L 法」という)の適用範囲を拡張し、推定断層面積 S を起点に震源パラメタを設定する方法に準拠する 3 ステージ・モデルを提案したものである。</p>	

賞	<p>新しい $M_{JMA} - M_0$ 関係式の提案にあたっては、既存の関係式と実データのずれの原因や地域性の有無を検討、考察し、震源インバージョンで求められた値と比較して妥当性を検証している。また、提案する第2ステージと現行レシピのL法の $L - M_0$ 関係式がほぼ一致することに着目し、もともになるデータが得られた時代に計測・推定可能であった数値を踏まえた考察を加えている。</p> <p>現行レシピはL法の掲載理由を「日本各地で長期評価された多数の活断層体で発生する地震の強震動を一定以上の品質で安定的に計算するため」としており、全国地震動予測地図の作成に限らず、今後、多様な主体が強震動予測、地震ハザード解析等を進めるうえでも、適用範囲が広く信頼性の高いL法は有用と考えられる。本論文は新しい $M_{JMA} - M_0$ 関係式および3ステージのL法を提案したうえで、過去の経緯やその時々観測技術の成熟度等を踏まえた考察を丁寧に行うことで信頼性の担保に努めており、今後の強震動予測に資する貴重な成果が得られたものと考えられる。以上のことから、本論文は本会論文賞に相応しいと判断した。</p>
---	--

2025年度日本地震工学会 論文奨励賞

賞区分	受賞業績名/業績発表論文	受賞者名(敬称略)
論文奨励賞	<p>海水が海底地盤上の観測地震動に及ぼす影響評価</p> <p>■受賞理由</p> <p>2011年東北地方太平洋沖地震の発生以降、海域で発生する大地震に対するより早い警報のニーズが高まっており、鉄道の早期地震警報システムにおいても海底地震計情報の活用が検討されている。既存のP波警報手法は陸上地表の地震計で有効性が確認されてきたものであり、海底地震計に適用するためには海底地盤の増幅特性や、海水が海底での観測地震動に及ぼす影響を把握する必要がある。</p> <p>本論文では、陸上地中に対する海底の地震動のスペクトル比を用いた検討を行っている。その結果、海底表層でP波のみが海水中へ透過することにより、P波のスペクトル比に数分の1程度の明瞭なトラフが出現し、その周波数は海底地震計の設置水深に応じて4分の1波長則に従い変化することを明らかにした。また、海底地震計データの時刻歴波形に基づいて、海底地盤上で観測されるP波初動の振幅は海底地中からの上昇波振幅の2倍以下となることや、P波の海面反射波が海底での観測P波の位相に与える影響が海底地震計の設置水深によって異なることを実証した。これらは既存警報手法を海底地震計へ適用する際に警報精度を低下させる要因となることを明確に指摘した。</p> <p>本論文の研究成果は、P波の海水伝播を考慮することにより、海底での観測P波を利用した早期地震警報の実現可能性を示すものであり、今後の早期地震警報システムの高度化への貢献が期待される。以上のことから、本論文は論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>	<p>森脇 美沙(鉄道総合技術研究所 鉄道地震工学研究センター)</p>

論文奨励賞	振動台加振実験による動滑車天井制振システムの効果検証	真島 僚(豊橋技術科学大学)(現在所属:株式会社安藤・間 技術研究所)
	<p>■受賞理由</p> <p>大規模空間を有する建物に設置された吊り天井の損傷や落下を防ぐことを目的として、候補者らは滑車の変位増幅効果を吊り天井に適用した動滑車天井制振システムを提案してきた。これは、滑車装置によって増幅された天井と主架構間の相対変位をダンパーに伝達し、在来天井よりも地震時の振動を低減することで天井の損傷を防止するものである。</p> <p>本論文では、1 方向加振実験により動滑車天井制振システムの天井面応答低減効果や動滑車の有用性を検証している。その結果、提案システムは天井入力エネルギーの 90%以上を吸収し、天井面の応答変位と加速度の両方の応答を非制振時の半分以下に低減することを明らかにした。加えて、吊り天井の固有周期算出における吊りボルトの支持条件や計算式の影響について検討している。さらに、2 方向加振実験によりシステムの直交方向に地震動が作用する場合の実用性や天井面における回転挙動の有無を検証し、ねじれ応答は確認されず各構面の応答は独立していることを明らかとした。</p> <p>本論文の研究成果は、天井裏の空間を確保しつつ、斜め材の設置により天井の耐震性を確保する方法では困難であった天井面の加速度応答の低減を可能とする画期的な制振システムを提案するものであり、今後の大規模空間を有する建物の耐震設計技術向上への貢献が期待される。以上のことから、本論文は論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>	